

東京外国語大学教授
中嶋 嶺雄氏



去年の今ごろ、中国の天安門事件は、安南広場は大変な状況で、大変な運動です。しかし、三十年ぶりの中ノ首脳を代表にして、東欧は、会議の際記念式典もでき、世界の大きな変化が起きず、六月四日の天安門事件、たと言ってもいいでしょう。至りました。

東アジアの近代化と漢字文化 — 地域研究の立場から

ちようど、今年の五・四、韓国とちよつと事情が違ひ、言ひました。表向きは、逆の中絶は、一文化大革命、漢字や儒教を、運動記念日に北京を訪れました。高麗アパルトが立、クルスレーン主義を唱え、のころから、漢字の簡易化、持つ意味は大きいのです。したが、天安門広場では、少、儒教が大切な道言を進めました。最近、儒教は、リベラルで開放的、でも不穏な動きがあれば、都会、金日成の個人崇拜は、したには驚きました。しているようですが、そのな伝統があるという学者も取り締まる、激重な警戒態、徹底しており、人間主体の、同時に強固な体制の基礎は、ツケは必ず表れるでしょう。例えは、儒は、これで、選定できるのではないで、勢を見つめました。宗教とも考えるチユエ思想、それなから、納得もしま、うか。

果たして中国はこの体制、想、(注)の中に、二千万、も一つ、ハンクルは、民は儒教思想もあがたな、の中で近代化できるの、の国民は、胸解している、族の文化だと言ひながら、い感じ。家は、漢字、研究のなアプロチが今後、必要ではないでしょうか。一度、地域研究で基礎を、固める必要があると思ひま、ます。その時、言葉をおろさ、かにはできません。私た、漢字の漢学的、文学的、意味だけでなく、今日の発展、人間の能力開発、特に勤勉、の中で漢字文化の意味を、ささ高めるのに役立つので、考えざるべからず、思います。

NEIBS (新興工業国、地域の経済発展と勤勉、(注)チユエ(主体)さ、欧米の注目するところ、です。それは漢字文化、金日成主席によって唱道、園であることにカキがあり、され、北朝鮮社会全般の指、漢字のありがたを、導理となつて、いる思想、忘れているわれわれ日本人、その指針は、思想、は、もう一度考える必要が、おける主体、政治における、自主、国防における自衛、近代化がひとたび緒につ、経済における自衛、限りません。

漢字による教育は、実は、漢字の簡略化は、字を覚、理解を深めるといった地域、でもちよつとが目的です。必要ではないでしょうか。

一度、地域研究で基礎を、固める必要があると思ひま、ます。その時、言葉をおろさ、かにはできません。私た、漢字の漢学的、文学的、意味だけでなく、今日の発展、人間の能力開発、特に勤勉、の中で漢字文化の意味を、ささ高めるのに役立つので、考えざるべからず、思います。

NEIBS (新興工業国、地域の経済発展と勤勉、(注)チユエ(主体)さ、欧米の注目するところ、です。それは漢字文化、金日成主席によって唱道、園であることにカキがあり、され、北朝鮮社会全般の指、漢字のありがたを、導理となつて、いる思想、忘れているわれわれ日本人、その指針は、思想、は、もう一度考える必要が、おける主体、政治における、自主、国防における自衛、近代化がひとたび緒につ、経済における自衛、

日本縦断講演会 漢字文化を考える

海外旅行でも、中国や韓国などは、漢字の看板があつて身近に感じた、という人は少なくないだろう。この漢字を通して世界を見てみようという日本縦断講演会「漢字文化を考える」(大修館書店主催、北海道新聞社後援)が五月十七日、札幌・道新ホールで開かれた。同講演会は同書店の月刊誌「しにか」創刊、「大漢和辞典」全十三巻、別巻・語彙索引の完結を記念し、全国六都市で行われているもので、札幌では東京外大の中嶋嶺雄、国際日本文化研究センターの中西進副教授が講演した。その要旨を紹介しよう。



漢字の持つ意味と文化のかかわりについて、約700人が熱心に耳を傾けた「漢字文化を考える」講演会=札幌・道新ホール

国際日本文化研究センター教授
中西 進氏



私は、関係がなぞで、支配権を確立したと言、実は大ありの、カラスとカ、わられています。カラスは、エルを取り上げたと思、鴨という名の一族の祖先で、変身がカラスと考えられる、あると伝えられています。

中国の古い書物に、太陽の中にカラスがいるとか、カラスが太陽を背負っているという記述があります。日本でも太陽とカラスは関係があります。神武天皇は、カラスに導かれて大和に入

ユーラシア大陸の伝説—鳥と蛙

私は、関係がなぞで、支配権を確立したと言、実は大ありの、カラスとカ、わられています。カラスは、エルを取り上げたと思、鴨という名の一族の祖先で、変身がカラスと考えられる、あると伝えられています。

中国の古い書物に、太陽の中にカラスがいるとか、カラスが太陽を背負っているという記述があります。日本でも太陽とカラスは関係があります。神武天皇は、カラスに導かれて大和に入

ユーラシア大陸の伝説—鳥と蛙

は、目が片方見えず、片足がける、ポータンという神も不自由で、いつもカラスを、います。ポータンとは、熱の意、同にとまらせています。こ、味、つまり熱人なれず、カラスの言葉によつて、古代ギリシアの神は、み、呪(じゆ)文を唱え魔法を、んなんで戦っていますね、あれは、力がみなぎります、このルフは、いろいろな、体を熱を持つからです。平、人を凍死させます。足が懸、清盛も、戦いの後高熱が出、いと言ひは、ギリシア神話、で、水に入ると水が熱え、のオティプス。神託を向、上がったとも言われます。うところは、シャーマンの、以上の例で、カラスは熱、においします。ルフは、関係があると言ひないで、神である同時、英雄で、し、うか。

もあるのです。力を持つ、万葉集に、インドの磨瓶、というものは、知力、誇ら、の名がついた、バラモン僧、なければいけない、神の、正の歌が出てきます。布の

企画制作 北海道新聞社広告局